

英詩の世界

— 理解と鑑賞 —

石井正之助著

大修館書店

英詩の世界

理解と鑑賞

石井正之助

大修館書店

著者紹介

石井正之助 (いしい・しょうのすけ)

- 1912年 東京に生まれる
1935年 東京外国語学校(現 東京外国語大学) 英語部卒業
1950年 東京文理科大学研究科在籍(文部省内地研究員として)
1977年 東京学芸大学, 白百合女子大学退職後, 創価大学教授, 現在に至る
主な著書 『ロバート・ヘリック 研究・附抄訳「ヘスベリディーズ」』, *The Poetry of Robert Herrick (Renaissance Monographs: 1) その他*

現住所 東京都新宿区須賀町8

英詩の世界

© S. Ishii 1976

1976年11月20日 初版発行 ￥1,800

1978年12月15日 3版発行

検印 著者 石井正之助

省略 発行者 鈴木敏夫

発行所 株式会社 大修館書店

101 東京都千代田区神田錦町3-24

電話 (03) 294-2221 (大代表) / 振替 東京 9-40504

組版・印刷 大文堂印刷 / 製本 司 製本 / 装幀 近藤敬三

は し が き

この本は、英詩——英語で書かれた詩、英米の詩人の作品——を理解し鑑賞するために必要と思われる基礎知識と、それを実際の作品について応用する手順とを、さまざまな角度から検討しようとするひとつの試みです。

結果的にはイギリスの詩が中心となり、それも今世紀の30年代ぐらいまで、しかもほとんど抒情詩のみに限られた形になりました。それというのも、英詩の世界のアウトラインを描くこと、英詩を読み始めた人たちのために、その魅力を十分に味わうための手引きを書いてみたいというのが筆者の念願だったからで、そのためには、近づきやすい内容と長さの作品を選ばなければなりません。いきおい、共感をよぶことが容易と思われる抒情的な叙景、叙想を内容とする作品、しかも現代からあまり遠くないものが主となることになりました。

第Ⅰ部では基礎的な点を事例によって解説し、第Ⅱ部の12の章では20世紀初めの詩人たちの作品を使って、詩の形式・内容の確実な理解に達する作業の進め方、それをもとにしての正しい鑑賞の態度のありようを、時には詳しく、時には示唆の程度にとどめて、なるべく読者と共に考えることを念頭において説明しました。第Ⅲ部は、英米詩の展開を追って、ルネッ

サンス期から現代までの代表的な詩人の作品に大意と注を付けて、読者の自由な読みのための材料を提供するためのものです。

もちろん、英詩の理解、鑑賞について必要な知識のすべてを網羅することなどは到底望めないことですし、また、この本はそれを意図するものではありません。さまざまな制約から、収められなかった作家・作品（多くの現代詩人、ことにアメリカの詩人たち）、取り上げなかった様式（叙事詩、諷刺詩等）、詳しく触れなかった面（韻律法上の形式やその用語等、ただしこれらの中には意識して避けたものもあります）などは、すくなくありません。もし機会が与えられたら、それらを扱う続篇を書いてみたいとも思っています。

この本は、英詩に興味を持つ若い人たち、大学生（英文専攻の学生に限らず）、英語の先生、その他英文学に関心を寄せる一般読者を対象に考えたものです。英語や英文学の学習・研究に英詩を読む作業が必要であり不可欠のものであることは言うまでもありませんが、日本の詩と比べてのイギリスやアメリカの詩という点から、英詩の世界を垣間見ることも奨められてよいことと思います。第Ⅱ部にはこのような考えから、一般読者、学生、英語教師をそれぞれ念頭において書きわけた章があります。

この本はどこから読み始めてもよいものです。第Ⅱ部もしくは第Ⅲ部の興味を感じた作品から入って、そのなかの表現形式の説明や、作者の英米詩の展開のなかでの位置などを第Ⅰ部で確めるような読み方も考えられます。巻末の索引も活用してほしいものです。参考書目（英文のものに限りませんが）のなかには、初歩的・入門的のものは*印で示して、さらに深く広く英詩を読む手がかりとし、また入手しやすい作品集も付記しておきました。詩人の名前を英語で示し生歿年を加えることを各部で繰り返したのも読者の便宜のためです。作品の意味をとりやすくするため、大部分の詩に日本語で大意を添えました。いずれも訳詩として独立させるほどの

推敲は加えてありません。ただ理解を助ける参考として読まれることを希望します。

計画を立て執筆を始めてから、さまざまな支障が出て何度も中断し、担当の川口昌男氏にはたいへんご迷惑をおかけしました。この本がまがりなりにも陽の目を見ることができるようになったのは、同氏の絶えざる激励のおかげです。また、第Ⅱ部、第Ⅲ部の一部は、かつて *Student Times*, 『英語教育』, 『英語青年』, 『高校英語通信』などの誌上に発表した記事に加筆訂正を加えたものであることも書き添えておかなければなりません。なお原稿の浄書に矢口はるみさん、校正に須永静江さんのお手伝いをいただいたことを付記して感謝の意を表します。

1976年9月

石井正之助

ACKNOWLEDGMENTS

For permission to use copyright material, the following acknowledgments are made:

For HILAIRE BELLOC: "February", from *Collected Verse*, to Messrs. Gerald Duckworth & Co. Ltd.

For LAWRENCE BINYON: "The Little Dancers" and "The House That Was", to Mrs. Nicolette Gray and the Society of Authors, on behalf of the Lawrence Binyon Estate.

For EDMUND BLUNDEN: "The Midnight Skaters", from *Poems 1914-1930*, to Messrs. Gerald Duckworth & Co. Ltd.

For ROBERT BRIDGES: "I love all beauteous things" and "When June is come", from *The Collected Poems of Robert Bridges*, to the Oxford University Press.

For FRANCES CORNFORD: "The Country Bedroom" and "London Spring", to Messrs. Barrie & Jenkins.

For W. H. DAVIES: "A Great Time" and "When Leaves Begin", from *The Complete Poems of W. H. Davies*, Jonathan Cape Ltd., to Mrs. H. M. Davies.

For WALTER DE LA MARE: "Nod" and "Summer Evening", to the Literary Trustees of Walter de la Mare, and the Society of Authors as their representative.

For ROBERT FROST: "Tree at My Window" and "Once by the Pacific", from *The Poetry of Robert Frost* edited by Edward Connery Lathem. Copyright 1928, © 1969 by Messrs. Holt, Rinehalt and Winston. Copyright © 1956 by Robert Frost, to Messrs. Holt, Rinehalt and Winston, Publishers.

For ROBERT GRAVES: "Lost Love" from *The Collected Poems of Robert Graves*, to Messrs. A. P. Watt & Son.

For THOMAS HARDY: "The Oxen", from *Collected Poems*, to the Trustees to the Hardy Estate and Messrs. Macmillan Publishing Co. Inc., London & Basingstoke.

For A. E. HOUSMAN: "Be still, my soul, be still; the arms you bear are brittle" and "Loveliest trees, the cherry now", to the Society to Authors as the literary representative of the Estate of A. E. Housman and Messrs. Jonathan Cape Ltd., publishers of A. E. Housman's *Collected Poems*.

—: "Infant Innocence(The Grizzly Bear)", to the Society of Authors as the literary representative of the Estate of A. E. Housman and Messrs. Jonathan Cape Ltd., publishers of Lawrence Housman's A. E. H.

For JAMES JOYCE: "O sweetheart, hear you" and "Song", to the Society of Authors as the literary representative of the Estate of James Joyce.

For D. H. LAWRENCE: "Spring Morning" and "A White Blossom", from *The Complete Poems of D. H. Lawrence*, published by Messrs. William Heinemann Ltd., to Messrs. Lawrence Pollinger Ltd. and the Estate of the late Mrs. Frieda Lawrence.

For EDGAR LEE MASTERS: "Ann Rutledge" by Edgar Lee Masters from the *Spoon River Anthology*, published by Messrs. Macmillan Publishing Co. Inc., to Mrs. Ellen C. Masters.

For EDWIN ARLINGTON ROBINSON: "The Sheaves", from *Collected Poems*, copyright 1926 by Edwin Arlington Robinson, renewed 1953 by Ruth Nivison and Barbara R. Holt, to Messrs Macmillan Publishing Co., Inc.

For SIEGFRIED SASSOON: "The Child at the Window", to Mr. G. T. Sassoon.

For JAMES STEPHENS: "The Snare", from *Collected Poems*, to Mrs. Iris Wise and Messrs. Macmillan, London & Basingstoke.

For W. J. TURNER: "The Music of a Tree", to Mrs Joan F. Lisle.

For W. B. YEATS: "The Lake Isle of Innisfree", from *The Collected Poems of W. B. Yeats*, A. P. Watt & Son, to Mr. M. B. Yeats and Miss Ann Yeats.

第Ⅱ部第9章の Housman, "Be still, my soul, be still" の項は、『英語青年』(1964年2月号)より加筆転載したものである。

目 次

はしがき iii

ACKNOWLEDGMENT vii

I. 詩の成立——理解の手がかりをつかむ 1

1. 詩とは何か 3
2. 詩の分類 12
3. 詩の言語 16
 1. 詩の用語 16
 2. ディノテーションとコンnotation 18
 3. イメージ 20
 4. 比喩的表現 23
 5. シンボル 33
 6. 修辭的技巧 35
4. 詩の形式 39
 1. 韻律 39
 2. リズムの型 42
 3. 韻について 45
 4. 自由詩 51
 5. 図形詩 52
5. 詩の内容 54
6. 詩の作者と読者 77
7. イギリス詩の展開 81

8. アメリカ詩の展開 90

II. 詩の構造——鑑賞の手順をさぐる 95

1. 詩の構造 97
2. 自然への共感 103
3. ことばの魔力 110
4. 独自の統一性 114
5. 作者の視点 117
6. 孤独な世界 120
7. 戦争への反省 124
8. 広がる視野 128
9. 哀愁と諦観 131
10. 幼時の回想 137
11. 想像力と同情 141
12. 少年の感傷 145

III. 詩の実態——いろいろな詩を読む 151

Edmund Spenser, *Sonnet* ('One day I wrote her name upon
the strand') 153

William Shakespeare, *Song* ('Fear no more the heat o' the
sun') 155

Christopher Marlowe, *The Passionate Shepherd to His Love*
158

Ben Jonson, '*It is not growing like a tree*' 161

John Donne, *Sonnet* ('Death be not proud, though some have
called thee') 163

Robert Herrick, *To Daffodils* 165

George Herbert, *Love* 167

Thomas Carew, *A Song* ('Ask me no more where Jove

bestows')	171
John Milton, <i>On His Blindness</i>	174
Andrew Marvell, <i>The Garden</i>	176
Henry Vaughan, ' <i>They are all gone into the world of light</i> '	185
Alexander Pope, <i>The Quiet Life</i>	189
William Blake, <i>Tiger</i>	192
Robert Burns, <i>A Red, Red Rose</i>	196
William Wordsworth, ' <i>She dwelt among the untrodden ways</i> ', ' <i>A slumber did my spirit seal</i> '	199
George Gordon, Lord Byron, ' <i>And wilt thou weep when I am low?</i> '	202
Percy Bysshe Shelley, <i>To Jane: 'The keen stars were twinkling'</i>	205
John Clare, <i>Mary</i>	208
John Keats, ' <i>Bright star! would I were...</i> '	211
Thomas Hood, <i>The Time of Roses</i>	214
Alfred Tennyson, <i>Claribel: A Melody</i>	217
Robert Browning, <i>Love in a Life</i>	220
Matthew Arnold, <i>To Marguerite</i>	223
Dante Gabriel Rossetti, <i>Three Shadows</i>	227
Thomas Hardy, <i>The Oxen</i>	230
Gerard Manley Hopkins, <i>Spring</i>	232
Robert Bridges, ' <i>I love all beauteous things</i> ', ' <i>When June is come</i> '	236
William Ernest Henley, ' <i>O gather me the rose...</i> '	238
Oscar Wilde, <i>Symphony in Yellow</i>	241
Alfred Edward Housman, ' <i>Loveliest of trees</i> ', ' <i>The Grizzly Bear is huge...</i> '	243
William Butler Yeats, <i>The Lake Isle of Innisfree</i>	246
Hilaire Belloc, <i>February</i>	249
Edward Thomas, <i>Snow</i>	252

James Joyce, 'O sweetheart, hear you', <i>Song</i> ('O, it was out by Donnycarney')	253
David Herbert Lawrence, <i>Spring Morning, A White Blossom</i>	257
Frances Cornford, <i>London Spring</i>	262
Rupert Brooke, <i>Song</i> ('All suddenly the wind comes soft')	264
Walter James Turner, <i>The Music of a Tree</i>	266
Edmund Blunden, <i>The Midnight Skaters</i>	269
Henry Wadsworth Longfellow, <i>The Tide Rises, The Tide Falls</i>	272
Edgar Allan Poe, <i>Eldorado</i>	275
Walt Whitman, <i>Cavalry Crossing a Ford</i>	278
Emily Dickinson, 'Hope is the thing with feathers'	280
Edwin Arlington Robinson, <i>The Sheaves</i>	282
Robert Frost, <i>Tree at My Window</i>	284
Edgar Lee Masters, <i>Anne Rutledge</i>	287
参考書目	289
術語索引	295
INDEX OF AUTHORS AND TITLES	299

I 詩の成立

——理解の手がかりをつかむ

1. 詩とは何か

この本の読者の多くは、今までに英語で書かれた詩の1篇か2篇は、読んだ経験を持っておられると思います。詩と呼ばれるよりは英語の歌と呼ぶほうが正しい作品であってもよいのです。読んだとき、あるいは習ったときには、あまり興味を持たず、気にもとめなかったその作品が、何年かたって、ある機会にふと思い出される、という経験はあるでしょうか。もしそのような経験を持つ読者であったら、英詩の世界に入ってその美しさ楽しさに触れることは難しいことではありません。また、そのような経験を持たない人でも、この本を読み進むうちに、そういう経験のための材料やきっかけがいくつも用意されていることに気づかれるでしょう。

詩は、文学のさまざまな様式のなかでも、ことに緊密な構成を持ち、昇華の過程をいくつか繰り返したあとの濃度の高い内容を持っていて、一読しただけでは十分に理解しにくい作品もあります。一方、純粹かつ素朴な抒情の流れが短い詩形のなかにおさめられて、美しい歌声のように胸のなかに込みこんでくる作品もあります。

いずれにしても、日本の詩人の作品のいくつか、万葉の古歌にせよ、芭蕉、蕨村の俳句にせよ、近代、現代の詩人の新しい詩にせよ、そのいくつかを——たとえ一部であろうと——記憶のなかに持つことが、よしや索莫とした生活のなかによいと、大きな慰めであり喜びでありうるように、英語を学ぶものにとって、折にふれ、口をついて出てくる英詩のたくわえ

を持つということは、精神的な大きな富を持つことにほかなりません。

ところで、このように詩が読者の記憶のなかにとどめられ、また、ある時ふと思い出されてよみがえるためには、その詩がその読者に類似の思想なり感情なりで親近感を抱かせることが、ひとつの要件となります。アメリカの小説家スティーヴン・クレイン (Stephen Crane, 1871-1900) は、その短篇のなかの代表的作品 “The Open Boat” (「オープン・ボート」) に、作者の分身と見られる新聞の特派員を登場させます。この記者は、本船が難破したあと、他の三人の人物と乗りこんだ、小さなボートで海を漂流中に、力を尽くして波浪と戦い、しかも溺死が避けられない運命と感じて、自分の必死の努力が無に帰する怒りと絶望のうちに、ふと頭によみがえる次の詩行に気づきます。彼は「それをとうの昔に忘れてしまっていたことさえ忘れていた」のですが。

A soldier of the Legion lay dying in Algiers;
There was lack of woman's nursing, there was dearth
of woman's tears;
But a comrade stood beside him, and he took that
comrade's hand,
And he said, "I never more shall see my own, my
native land."

(外人部隊の一人の兵士がアルジェで死の床に横たわっていた。
傍らには看取ってくれる女もいなければ、嘆いてくれる女の涙もな
かった。
ただ一人の戦友だけが立っていた、その手を取って
兵士は言った、「ぼくは二度と、あのふるさつを見ることはあるまい」)

遠い昔、教室でこの詩を読んだ時、この記者(つまり、少年スティーヴン)は、ほとんど何の感銘も受けませんでした。アルジェの外人部隊の兵士の悲しみは、級友が何度彼に説明しようと、自分の鉛筆の芯の先が折れたことよりもっと重大だとは思われなかったのです。ところが、いま自分

自身生死の境に立たされてみると、故郷を遠く離れた土地で死に瀕している兵士の気持が、生きた人間のなまなましい体験として、厳肅な、悲壮な、かつ、すばらしい事実として、詩人の胸のなかの疼^{うづ}きの表現だけにとどまらない、深い意味を持って、この特派員の心のなかに大きく広がってくるのです。彼の目の前には、その兵士が砂の上に身を横たえ、蒼白い左手を、消えていく生命を抑えとめようとするかのように胸にあてている姿がくっきりと浮かんできます、指の間からは血が滴たりながら…。

クレインの筆は、洋上を漂流する局限状況のなかの人間の心理を細かく追っていくのですが、さしあたって、われわれの目的には、「忘れられた」作品の一部、それも以前には別に深く心にもとめなかった作品が、たまたま死に直面するという状況のなかで、新しい意味を持ってまざまざと蘇ってきた、という一つの経験に焦点をあてるだけでよいでしょう。

ある一つの詩が読者の心のなかに抜きがたい根を張るということ、あるいは、ある日突然啓示のように光につつまれて思い出されるということが起こるためには、作品と読者の間に共感を成立させるものの存在が必要です。試みに、われわれの記憶のなかからある一つの作品を取り出してみますと、——作者はどこの国の人であろうと、表現する言葉が日本語でも外国語でも——そのなかに盛られた思想なり感情なり、風景なり物語なりが、ある時点でのわれわれの生活のなかに、対応するもの、深く関わるものを持っていたことに気づきます。時には初めて触れる作品のなかに、自分の胸のなかにあって表現されることを求めていたものが、きわめて適切に、いっそうの洗練と巧みな形式を与えられているのを見出すこともありましょう。

ジョン・キーツ (John Keats, 1795-1821) は詩を定義して、“It [Poetry] should strike the reader as a wording of his own highest thoughts, and appear almost a remembrance.”(詩というものは読者に、それが彼自身のもっとも高貴な思想を言葉で表わしたものだ、と、はっと悟らせ、しかも、自分が忘れていたその表現を今思い出したのだという気持を持たせるもの